

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第49号 2013年12月10日

発行 中部学院大学 宗教委員会 〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211
中部学院大学短期大学部

「新任学長としてチャペルアワーに出席して感じたこと」

古田善伯 (中部学院大学 学長)

本学の学長として4月から新しい道を歩みだすことになりました。学長に就任した最初の時点では、どの行事も初めての経験ばかりで、日々行われる業務や任務をこなすのに精一杯という感じでした。そんな中で、本学のチャペルアワーに出席するようになり、この時が私にとっていつかの安らぎの場となりました。

チャペルアワーに出席するようになったある時点で、カナダで体験した教会での出来事が思い出されてきました。それは、今から24年前にカナダ（ハミルトン）にあるMcMaster大学へ在外研究員として滞在していた時のことです。滞在初期のころは自分の毎日の生活を楽しみながら過ごしていましたが、滞在後半になってMcMaster大学に

在学している日本人と知り合い、それまで知らなかった場所へ案内してもらうようになりました。ある時、町の外れにある古風な教会へ連れて行ってもらった時のことが今も記憶に残っています。

この友人とともに、日曜日に礼拝が行われている教会の中へ入って神父の話を聞きながら、興味深く部屋の中の雰囲気を観察していました。そこには200名以上いたと思いますが、とても静かで

厳粛な雰囲気の中で式典が進行しているように思えました。私はキリスト教徒ではないのですが、周囲の人々が讃美歌を歌い、静かに話を聞いている姿

を見てみると、この人たちは本物の信者だという雰囲気が漂ってきて、自分もその仲間になったような気分になっていました。

この教会では、ドイツ（ケルン）の巨大な大聖堂に入った時の体験とは全く違った柔らかな気分を味わうことができました。なぜそういう気持ちになったか分かりませんが、本学のチャペルアワーに出席するようになってから、この気持ちが湧き上がってきました。

本学のグレースホールで「主の祈り」を読み上げたり、杉山先生のパイプオルガンの演奏を聞きながら讃美歌を歌っていると自分の気持ちが和らいでいく

のを感じています。そして、最後に「Peace Be With You」と言って握手を交わしてから部屋を出る時にはなんとなく気分が爽快になっています。この感覚は何であろうか、これは私個人だけのことなのか、いや多くの人が私と同じような感覚になっているのではないだろうか。こんな思いを持ちながらチャペルアワーに出席しているのが今の私です。



(チャペルアワーでの古田学長)

クリスマスは、家族や友人、地域の方々と様々な触れ合いや語り合いをする季節ですね。学生と教員がクリスマスにちなんだエッセイ書いてくださいましたので、お読みください。

クリスマスの静けさ

人間福祉学部 ハワード・ケン・ヒガ

クリスマスは、私と兄姉にとって一年でもっとも楽しい時間でした。母と父がそのようにしてくれました。父はとても厳格でしたが、クリスマスをいつも「でかく」してくれました。一番大きな木（あるときなど、大きすぎて家の中に入りませんでした）、大きな飾り、大きなプレゼントなどです。（アメリカでは「お年玉」がありませんので、クリスマス・プレゼントは子どもたちが何よりも待ち焦がれるものです。）父は寡黙な人ではありませんが、バスケットボール・コート、野球のバッティング・ケージなどを作ってくれるものですから、



（お孫さんと遊ぶヒガ先生のお父さま）

近所の子どもたちはうちに来て遊んでいました。父は遠くから静かに見守ってくれました。クリスマスも同じです。いや、クリスマスは特別でした。

私には三人の子どもがいます。そして同じことをしようとしている自分に気づきます。近所の人たちは、11月になりますと聞いてきます。「で、今年はいつ、クリスマスの飾りつけを始めるの？」そして、毎年クリスマス・シーズンにライトで近隣を輝かすことに感謝して下さいます。私は父よりは話す方ですし、子どもたちと一緒に遊びます。また、いつも妻に次のように話しかけます。「いつか子どもたちが『お父さん、これってちょっと面倒くさくない？』って言い出すまでは、デコレーションを続けたいね」と。今のところ、子どもたちは楽しみにしていますので、私は安泰といったところです。

ところで、クリスマスの意味とは何でしょうか？

飾り付けやライトのことでしょうか？ プレゼントのことでしょうか？ ゲームや歌のことでしょうか？ 教会での特別なプログラムのことでしょ

うか？

その答えは、5歳の子どもが教えてくれました。アメリカのある研究者たちが5歳の子どものグループに質問しました。「愛ってな～に？」研究者たちが得た答えは驚くべきものでした。一人の少年がこう答えました。「愛ってね。クリスマスの朝

にね。プレゼントをあけるのをやめて、静かにお耳しているとね、お空にあるものだよ。」

そうです！ 私にはその感じが分かります。その特別な「静けさ」を知っています。誰かのために一生懸命になること、愛を分かち合うこと。そのことこそ、クリスマスの聖書物語が語っていることです。「地に平和が、人に良きところがあるように。」讃美歌の歌詞にもこうあります。「静かな夜、聖なる夜、す

べてが静かで、すべてが輝いている・・・」（「きよしこの夜」の直訳）クリスマスの意味を私に説明してくれたのは5歳の子どもでした。もの静かだった父はこのことを理解していたのだと思います。彼は遠くから見守りながら、浮かれた騒ぎの中にも「静けさ」の特別な意味に注意を向けていたのでしょう。そして一年を通して持ち続けたのが、そうした静けさでした。

昨年、父が亡くなったとき、幼な馴染みが葬儀に来てくれて、こう話しかけてくれました。「ねえ、君の家で過ごしたクリスマスのこと、今でもよく覚えているよ。」友のころの中に残っていた楽しい思い出は、父が一生懸命にしてくれた、そのことだったのです。私たちは日本にいるものですから、父が私の子どもたち、つまり孫たちとクリスマス・シーズンに会えなかったことは心残りです。けれども、このクリスマス、父は孫たちを見守ってくれていて、これからも父自らあの「静けさ」の一部としていてくれると信じるものです。（原文は英語。翻訳：志村真）

ハンドベルクワイア

経営学部 4年 玉腰 由佳

私がハンドベルと出逢ったのは高校生1年の時でした。音色が本当に綺麗で、仲間と一つの曲を完成させた時の達成感に魅了され、気がつけば7年近くの年月が経とうとしています。入学後、初めて大学のハンドベルクワイアを目にした時、人数も体制もとても充実していると感じました。すぐに、入部を決めましたが、周りは知らない先輩ばかり。さらにキャンパスも違うので仲良くなれるかとても不安でした。他の用事を優先させて練習に行かない時もありましたが、先輩方のおかげで、続けられたことにとても感謝しています。いよいよ私も4年生になり、現在部長を務めています。皆をまとめる役は初めての経験で、とても不安でした。おまけに、4月当初は例年よりかなり部員が少なかったため、更に不安が募りました。この楽器は、一度始めるととても楽しくて、続けてみたいと思う人が多いのですが、あまり知られていない楽器なのか、なかなか勧誘が難しいのが現実です。顧問の岡田先生や、部員に支えてもらいながらなんとか頑張ってきました。その甲斐あって、夏休み前に部員が増え、今では16人になってボリュームのある演奏ができるようになりました。

毎年クリスマスの時期は、教会や福祉施設、サランカホールなどから、演奏の機会をいただいています。曲目も時節に合わせて、今はクリスマスソングのメドレーや、みんなが知っているような親しみやすい曲を選んでいきます。一昨年の保育園でのコンサートでは、演奏に加え、子どもたちと手遊びをし、楽しんでもらえるよう工夫しました。今年もたくさんの依頼をいただき、とても感謝しています。そして学内でも、両キャンパスのクリスマス礼拝での演奏を、是非聞いていただければと思います。

ハンドベルを通じて、人とのつながりが増え、多くの貴重な経験を味わうことができました。4年間やってきてよかったと心から思っています。



(写真、前列左から2番目が筆者)

クリスマスの思い出

経営学部 二神 律子

25年も前の昔話。クリスマスに新婚旅行に行った。場所はローマ、バチカン市国。ローマ法王のクリスマスメッセージを拝聴する為である(大袈裟ですみません)。

さて、クリスマスの朝、すがすがしい気持ちでホテルを出発し、地下鉄でバチカンへ到着した。ローマ法王ヨハネ・パウロ 世は、何十という国から来た人々に合わせて、其々の国語で「メリー・クリスマス」を伝えてくださった。お言葉が発せられる度に、感嘆の声があがる。勿論日本人にもはっきりとした口調で「くりすます、おめでとう」

を頂いた。数か所で喜びの声が聞こえた。

興奮冷めやらぬ群衆の一員となって帰路へ。キリスト教関係の専門店が並ぶとても魅力的な道である。かわいらしいお土産物に気を取られて、少しだけ余分に時間を過ごした様だった。急いで地下鉄の駅へ...「最終電車は出ましたよ。クリスマスだからね」親切な人が教えてくれた。かなり途方に暮れたのは紛れもない事実である。取あえず、大きな通りに出ることにした。ここで夫婦喧嘩にならなかったのは、さすがに神様の愛のお力である。(今ならば神様もこれ程の愛を届けるのは難しいかも知れない)。大通りにはバスがあるかも知れない。

しかし、車一台ない写真の様な美しい通りが、

桐が谷通信

目の前にあった。ビバ！ イタリア！ クリスマスを想うイタリア人に感嘆の声を上げざるを得ない。この国の人々は街にも出ず、静かに家でクリスマスを祝っているのだ。我々は歩き始めた。如何なる店も閉まっている町を、空腹を抱え、てくてく、

てくてくとホテルまで歩いた。勿論喧嘩せずに。

クリスマスをお祝いする全ての人と、神様の愛の力に畏敬の念と感謝を持ちながら。クリスマスおめでとうございます。

チャペル・アワーから

Sharing

分かち合うこと

suffering & happiness gives meaning to life

喜びと苦しみが人生に意味を与える



Hector Nihal (AIDS Awareness Society, Pakistan)

ヘクター・ニハール先生(エイズ啓発協会代表、パキスタン)

Mr. Nazir Masih, departed from Saudi Arab, for being HIV+, discriminated by society and lost its earning in treatment, cheated by doctors, with guilty feeling that because of him his family is suffering, decided to commit suicide, but contacted by AAS(AIDS Awareness Society), invited, joined HIV+ people's group, where they had individual, group and family counseling, and prayer service, this process of sharing life experience, gave meaning to his life. Now he is an advocate for the rights of HIV+ persons in Pakistan, and living a happy life with his family and family of HIV+ persons.

Same as in the first Christian community sharing of goods, they were one community, it is our responsibility to understand the needs, sufferings and happiness of our brothers and sisters, who in need so, we can have a happy and joyful life.

サウジ・アラビア出身のナジール・マシーさんは HIV ウィルス陽性者です。社会から差別され、治療するために財産を失ってしまいました。医者からボラれ、自分のせいで家族が苦しんでいるとの自責の念に苦しみ、自殺しようとして心に決めていました。けれども、「エイズ啓発協会」の働きかけを受けて、HIV 陽性者のグループに参加することができました。そこで個人カウンセリング、グループおよび家族カウンセリングを受け、祈りの会にも参加しました。こうした人生の経験を分かち合うことで、彼は人生に意味を見出すようになりました。今では、パキスタンの HIV 陽性者の権利擁護のために活動しながら、家族や HIV 陽性者の家族たちと幸せに暮らしています。

最初のキリスト教共同体がそうであったように、支援を必要としている私たちの兄弟姉妹のさまざまなニーズ、苦しみと喜びを理解することは、私たちの責務だと考えます。そうすることで、私たちは幸せで喜びに満ちた人生を送ることができるのです。

ヘクター・ニハール先生は、パキスタンのラホール市にある「エイズ啓発協会 (AAS)」の所長として、エイズ患者の権利擁護と啓発のために働いておられます。本学には、10月17日に来てくださり、関キャンパスでのチャペルでお話しく下さいました。毎年、この時期には、アジア各地から愛知県日進市にある「アジア保健研修所 (AHI)」に来られて研修を受けている、公衆衛生や地域医療、地域福祉の専門家の先生が本学に来てくださり、メッセージを語ってくださいます。

「2013 年度中部学院大学・中部学院大学短期大学部クリスマス献金」

Pray for the Philippines!

神さまのご祝福をお祈りいたします。今年も主イエス・キリストのご降誕をお祝いするクリスマスの季節がやってきました。クリスマスは、主イエス・キリストがご自身のすべてを人々の幸せのためにささげつくしたことから、私たち自身の一部を少しでも人々の幸せのためにささげ合うことを実践する季節です。

去る11月8日、フィリピン中部を襲った「台風30号（ハイエン）」は、レイテ島を中心に甚大な被害をもたらしました。11月20日現在の犠牲者は5,209人、行方不明者1,611人、負傷者も多数出ています。

今年の献金はまず、フィリピンの台風被災地のためにささげたいと思います。そして、東日本大震災の被災地をも継続して覚えたいと思います。ぜひとも、思いを込めてご献金ください。よろしくお願いいたします。

募集期間：2013年11月25日（月）～12月25日（水）

献金予定先：フィリピンの台風被災地のために（フィリピンYWCAを通して被災地に、クラゾン加藤先生の関係団体へ支援物資を送る費用に）

**東日本大震災の被災地のために（日本キリスト教団東北教区センターエマオ）
岐阜いのちの電話、野宿生活支援の会、エイズ啓発協会（パキスタン）ほか**

◎ 関キャンパス総務課カウンター・各務原キャンパス事務室に設置していますクリスマス献金箱に献金ください。ご協力をよろしくお願いいたします。

（ ページから）

ここにありますが、世の中では、経済的に力のある人に注目が集まることが多くあります。或いは社会的に大きな影響力のある人が目をとめられることが多くあります。しかし、神さまは、そうではなくて、社会の中で埋もれてしまいそうな人に目をとめておられる、というのです。とても嬉しいことです。

羊飼いたちが夜空で見たことも聞いたことも、伝えられた話し以上のことは分かりません。ただ、羊飼いたちがこんなことがあったと話した、それを伝え聞いた、そして、物語にして語り伝えられた、そして、聖書の物語になったという事実があるだけです。この物語を聞いた人たちは、あの羊飼いたちと同じような感動を覚えたのではないのでしょうか。世の中の人が見るような仕方で、神さまは人をご覧になるのではなくて、目立たない仕事をしている人に、神さまは目をとめていて下さる。社会の底辺に押しやられたような人々に、神さまは目をとめておられる。そのことに気づいた人たちにとって、羊飼いたちの物語は、宝のような、いつ思い出して心が熱くなる嬉しい物語だったと思うのです。

クリスマスは、美しい物語にうっとりするときではなくて、神さまの眼差しに気づいて、生きる力をもらうときではないかと思えます。もうすぐ2013年が終わります。そして、新しい年を迎えます。2014年も神さまから生きる力をもらって生きていこう、そう思えたら、最高のクリスマスだと思うのです。
メリー クリスマス！

2013年度 クリスマス礼拝

「小さき者に訪れる神」

日本キリスト教団川谷教会 牧師

川谷福祉会 川谷保育園 園長

柴田 彰 先生



日 時：12月19日(木) 11:00~12:15

(第2時限の講義は行いません。)

会 場：関キャンパス グレースホール

<講演内容>

人の将来と言うものはどういう風になるのか、本当に不思議です。今ここに存在しているというこの自分は、これまでに周りのだれか、或いは過去のちょっとしたことで大きな影響を受けているという事実があります。過去の小さな出来事、或いはちょっとした出会いが、その後の人生を大きく変えます。語りかけられたちょっとした言葉が、心に宿り支えとなることもあります。見守られている眼差しに気づいて、生きる勇気を得ることもあります。予期しなかった出会いや事件によって人生が変えられたこともあります。2011年の東日本大震災、そして原発事故による被害は、確実に私たちの歩みを変えた出来事です。人の歩みというのは不思議なものです。

クリスマスの礼拝では、聖書に書かれているクリスマスの物語のうち、羊飼いの物語をご一緒に読みましょう。この物語はとても嬉しい物語です。そして、この物語の中には大逆転があって、心が熱くなります。どうしてかというと、羊飼いというのは、当時どちらかというと社会的にスポットライトが当てられていた人たちではありませんでした。むしろ、社会の底辺的な所で汗水流して懸命に働いて社会の必要に応えている。しかし、社会的にはあまり評価されない。いや、むしろ蔑まれることさえあった人たちのようでした。しかし、そのような人たちが、世界で最初のクリスマスの出来事に立ち合うことになったのです。驚くべき逆転です。

皮肉なことに、当時神殿で礼拝していた人たちに、クリスマスの最初のニュースが届けられたのではなく、野宿していた羊飼いたちにそのニュースが届けられました。社会の中で影響力ある人たちではなくて、日々の生活に追われている羊飼いたちに、クリスマスのニュースが最初に届けられたのです。普通に考えれば、最初に、宗教的に熱心な人たちがクリスマスのニュースを聞くということがあるように思います。しかし、そうではありませんでした。社会的に力にある人たちではなくて、社会の片隅に追いやられたような人に、世界が驚くような嬉しいニュースが知らされています。

神さまは、社会の中で小さくされている人に目をとめておられる、というメッセージが (ページに)

<講師プロフィール>

1954年福井県生まれ。1976年に同志社大学文学部を卒業。1983年に東京神学大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了。1994年に米カリフォルニア州のPacific School of Religionに進学し、1997年5月に学位取得。宣教学博士。専攻はエコロジー神学。1983年4月より塚口教会(兵庫県)において伝道師として勤務した後、本庄教会(埼玉県)に赴任し牧師及び友愛幼稚園園長として勤務。1997年帰国後、川谷教会(福島県西郷村)の牧師及び川谷保育園園長に就任し、現在に至る。白河市医師会准看護学校非常勤講師。(哲学科)